

俳句

安藤 靖

家田 禮

木片か骨かレイテに蟻の列

(サンシャイン)

甘酸つばい葡萄に失せし恋いくつ

吉報くる捨てがたき世よ草の花

近松忌女の扇語りだす

天上の花と呼ぶべしシクラメン

飯野 修身

池野 隆

雲は沸き稲穂賑わう試験田

(はまべ)

蓮池を一周制す鬼やんま

百日紅犬も欠伸か寺の昼

仏笑む秋の傍道とほとほと

川底に影深々と秋の鯉

トンネルを抜けて一面月見草

(はまべ)

山降りし小さき手のひら鬼胡桃

柿紅葉かはるがはるに鳥集ふ

三味線の稽古の帰路や十三夜

雨音や栗きんとんの盆手前

原爆忌祈る体の揺れてをり

(天為湘南)

忽ちに華やぐ白磁桃二つ

良きことを三つ唱へて生ビール

走り梅雨宝探しの古本屋

夏蝶を先回りして一呼吸

石井政子

(鷹)

松蝉や乗り遅れたる無人駅
張りつめる開演ベルや涼新た
待針を数へて仕舞ふ秋夕焼
山粧ふ街に流行はやりのスニーカー
消灯を待つごきぶりの気配かな

石垣みち代

(むかご)

思いきり顔の体操初鏡
詩心のくすぐるほどの春の雪
令和三年口を覆ひて鬼やらふ
紫木蓮人間稼業もて余す
闇に咲く卜書の様な月見草

石塚佑伎子

大黒様重ねたる雲猛暑なり
初霜に厨子の明りや匂いたつ
山の端に夕日は淡く雪解かな
暮れる灯やそれぞれの秋物語
護摩をたく灰をかぶりしトンボかな

井尻浩彦

場末園壊れ遊具に差す春日
街中に涼し空地の四十坪
色鯉も混ざり河口の鯉の群れ
この街の芥を流せ秋出水
師走三日月倉庫の上に透き徹り

一色 千穂子

(波)

初電車いつもの位置に待ちにけり
梅ふふむ不透明なる世に生きて
お茶断ちの訳は言はずや桜餅
次々と消ゆる約束しゃぼん玉
茶の花やおしゃべり好きは母譲り

伊藤 梢

(神奈川県現代俳句協会
西部俳句研究会)

スニーカーひと足ごとに春を呼ぶ
遠くからあなたと分かる夏帽子
免許返納さくら紅葉の綺麗な日
雪の富士見たから今日も幸せ
冬青草夢のかげらを捜そうか

伊藤 真理子

(波)

冬はじめ明るき方へつづく水脈
初風や光に透けてしまひさう
百萬の梅花震はせ夜の地震
春光や海に向きたる百の墓
花守の花を遠見の昼餉かな

伊藤 美也子

(波)

日めくりの厚さは未来梅白し
涙目のゴリラ春風聞いてをり
流し目のやうな風吹く四月かな
食べて寝て空見て卯の花腐しかな
数珠玉や「ごめんさい」が言へなくて

今井 美恵子

う さ お

(波)

(はこ)

義経の騎馬像建ちし宮の藤

焼柴螺湯気より出でし肝二寸

土用東風小動岬とよもせり

主夫の座や包丁を研ぐ音涼し

長き夜の鳴かぬものこそ愛しけれ

秋霖の山を見ている飲んでいる

立冬や風音やまぬ空の奥

人生そこそこ湯豆腐ふつつ

艶良くてふてふてしきよ初鴉

仏壇にアマビエ二体春を待つ

岩谷 明子

江口 文子

(冬すみれ)

(天為湘南)

無人駅の置き傘二本秋暮るる

梅落す梅の数ほど声が飛び

ひさかたの寄席の名残や夕桜

黙読の眼鏡の曇る溽暑かな

迎え待つ傘も密なり夕時雨

睡蓮の葉に抱かれてまどろめる

庭越しのお茶の誘いや風鈴草

西瓜買ふ赤子のごとく手渡され

山暮れてナナカマドの実の赤さかな

大役を果せる壁の古暦

大久保 啓子

大平 雅芳

(たけのこ)

(季)

市役所の庭に白子の売られをり

傷あまたあり手のひらの桜貝

夜濯ぎや夫の退院少し延び

沈丁の匂ふともなき夜の重さ

サングラスかけてあいみよん聴ゐている

京浜運河とろりと春の日が沈む

夏の雲バス停五つの小旅行

さりげなき一語に氷菓くづれけり

秋思ふと遠く汽笛の聞こえきて

海女濡れて虹の雫へ手を伸ばす

大庭 浩子

大矢 暁美

(天為湘南)

(はまへ)

母なくて沈黙の家そぞろ寒

秋気満つ湖面黄に満つ御射鹿池

秋深し婆になりても母を恋ふ

月明り眠れぬ夜は米をとぐ

あやとりの糸もつれたり虫の闇

眠れぬ夜は月の兎と遊びたし

長き夜冥界からの長電話

初島も露天の中に浮ぶ秋

登り来て下るしかなし桐一葉

人の波すすきの波に寄り添いて

大山賢太

萩野樹美

牛膝頭にひとつ猫帰る

(翡翠・道草・渚・秋桜)

秋彼岸「お迎えに来た」と外の声

昔は田今は大きな花野原

稲光仔犬は躡で震えてる

どら猫がくわえて逃げ行く鰯雲

水無月や歴史を今に博物館

鈍色の石器の尖り半夏生

半夏青捉え離さぬ埴輪の目

御成敗式目の「一」梅雨寒し

露涼しでんと置かれたカノン砲

岡本泉

笠原与志生

終日をわれ素つびんの涼しさよ

秋高し出荷の芝生切り重ね

大木に寄り黄落の刻惜しむ

冬もみち調度簡素に永らへり

グラジオラス咲きし重さに傾ぎけり

(鷹)

校庭の子らを見下ろす白芙蓉

揺れ交はす庭一面の秋桜

我よりも背高く咲ける紫苑かな

垣越しに花びら散らす庭の萩

月の出を待ちて華やぐ芒かな

片岡 ふじ子

(はまべ)

寺詣り木の実踏みつつ姉妹
あかあかと入日輝く秋の風
鈴なりの渋柿の影のびる夕
萩の花人のうごきにゆれており
菊蕾ふくらむ先の薄紅に

加藤 静子

(はこべ・波)

カザルスのチェロ切なくて鳥雲に
ジャズで大きく井上陽水あたたかし
レクイエムきく日卯の花腐しかな
コスモスのゆれてふたりはアンダンテ
メサイヤの果てし本牧しぐれけり

金 栗 トモ子

(サンシャイン)

噴水の落下の後の余生かな
蝸牛ひと身という隠れみの
蛍舞う点滅している我が余生
回転椅子秋思ぐるりと元の位置
冥途への乗り換え駅は花野です

神谷 章夫

(季)

旧道に設計事務所山眠る
背の青き鳥の抜け出す木の芽雨
いつまでも去らぬ山鳩卒業す
動きさうな水もとどめて蝌蚪の紐
たかんなを提げ夕星の近きみち

亀倉美知子

河村青灯

看護への子のこころざし梅二月

藍染の印半纏涼新た

小春日や群鶏図より二羽三羽

積みあぐる薪うつくしき冬用意

未曾有なる世ぞていねいに煤払ふ

川 島 里 子

河 村 美 恵 子

親子連れスーパーで買うめだかかな

早起きすアラーム前の蟬の声

休耕地ざる菊植えて人來たる

鳥誘う紅葉よりも赤き実や

冬枯れや富士山覗くけやき道

(はまべ鷹)

待ち人の振る手あせびの向かうから

汚染地の牛ながらへり里桜

正装のをんな涼しき発車かな

ちやつきらく癒えし鏡に遠く聞く

焼諸の熱し持ち替へもちかへて

(鷹)

はまなすや島を返せと幟旗

向日葵畑震はせて行く米軍機

山小屋の弁当ぬくし天高し

昼間から開けるシャンパン巴里祭

四重奏ロビーに流れ花水

草柳節子

(天為湘南)

どこからか篠笛聞こゆ花辛夷

夏めくやドライカレーにパセリふる

秋の日や洗濯物に日の匂ひ

冬近し寢床に聞こゆ秋の雨

木枯や看護師の手の温かさ

久保田 恵子

(鷹)

基地の街新樹かすめる機影かな

梅雨の蝶道あるごとく海に出る

舟虫や岬の岩食む椎樹林

帰国子やカットグラスに梅酒注ぐ

無愛想な鳥よけふわり実南天

小林和子

反抗の小さき駆け引きねぎ坊主

森の子や手に玉虫の宝物

孤独なる神馬ねむさう朴の花

白粉花や駐在さんの戻る頃

秋苑のヴィーナス像や糸の雨

小堀 公美子

(鶴沼かほちゃ句会)

丑紅を点すはたちの薬指

花かをる墓守りの蜂何処から

かき氷とけゆく午后のホスピスに

雁渡し壕より仰ぐ競技場

ほろ酔ひの家路に見合ふ狸かな

小松原 キイ子

(一華)

餅花の影のにぎわふ青畳

しやぼんだま弾けムンクの叫びかな

暮れ残る谷戸に鶯鳴き合ひて

まんまるの月の障子を開けしまま

イマジンに師走の街の歩をゆるめ

小宮山 はるき

(みすず)

万緑の起伏三崎に沈みけり

石楠花や天城主峰の北くんだり

「一遍水」峠に汲むや蟬時雨

日焼けなき肩先に打つ接種かな

爽やかや富士北麓に湖立つ

小山 美穂

(みちくさ)

雲霧がシャボン玉吹き歩く道

芥子の花毒がありてもまだ奇麗

星月夜ムンクの絵を見て僧思ふ

五輪終えコロナ増えしもパラ五輪

終戦日多くの人が黙^{もく}禱^{ごう}す

紺谷 健一朗

(季)

父仰ぐ子の瞳に落花高きより

楼蘭の栄華遙かや胡沙来る

観世音立たれよ泰山木の花の上に

夏帽子ひさしに去年の波の音

鯛雲わが立つ崖の動きだす

齋藤 まり江

(波)

花吹雪老いの上にも若きにも
ジャスミンの香りどこから夕の鐘
青空に蜻蛉が止まる人止まる
水澄むや鯉が鱗をきらめかせ
新しき吾を求めて日記買う

佐野 とよ子

(みちくさ・秋桜)

黄金の色に輝く稲穂かな
稲刈りて重き稲穂に感謝する
空高くまんまるに浮び十五夜や
稲刈りは家族絵出の大仕事
夏おしむひたいの汗のこころ良さ

佐野 典比古

(詩あきんど)

パラフィン紙の皺伸ばしたる花曇
行く春や水底にある鉄の錆
薔薇を挿す銀巴里跡と思ひけり
十葉やいつもどこかに雨女
蚊遣り焚く夜を一人の着火音

篠田 清秋

マスクして江の島ながむ初日の出
初めてのポルトガル語や夏期講座
メダル五十東京バラや秋暑し
高齢犬動物愛護週表彰状
高齢者運転講習秋に終え

篠原広子

鈴木絹子

(季)

母と子の昼寝授乳を終へてより
昨日鳴きけふは声なき蟬となり
蓮の実飛ぶ帰郷かなはぬ子の空へ
秋扇久しく聞かぬ俳句論
芙蓉枯れ無音の風を送りけり

小夜更けて下駄の音揃う踊りの輪
鈴虫や隣家の灯り消えしより
リユックには空の弁当猫じゃらし
夕闇に残る焚火の匂いけり
相づちで続く会話や温め酒

清水 誠

鈴木 千枝子

(むかこ)

(天為湘南)

我はここ問わず語り香金木犀
渋皮煮今年限りよ妻が言う
春一番黒き雄姿やにつぼん丸
秋祭りなぜか女性はビール好き
交互咲く芙蓉赤白選挙カ―

古梅酒瓶の底なる憂ひかな
ウエディングドレスの試着虹二重
古ビルの地下にジャズの音晩夏光
修験者の鉦遠ざかる霧襖
古着屋の不思議な気配秋深し

栖原 由美子

相州 散人

使ひ継ぐ母の硯や水仙花

(鷹)

裏山の笹騒がせて鳥の恋

大輪の向日葵すでに下を向き

緑陰に少年野球飯を食ふ

グーグルの間ふ花の名や春帽子

雄蟬の腹は空つぽ鳴きやます

大潮に拾ふ天草との雲

秋立つや海鳴り耳に終日

葎切や蔵町めぐるサツパ舟

池の端に塩辛とんば数を増し

瀬戸 松子

高久 弘行

水の秋灯点して家安らげる

(鷹)

行く秋や伊万里の皿の萩芒

夏負けの左脳お手上げ詰将棋

父の日に脳トレの本届きけり

笹原に冷ゆる日輪猟期来ぬ

生も死もせくなせくなよ初蟬よ

枯菊を焚く青天に一穢なし

空襲の記憶の新た夾竹桃

抱き寄せて子の髪にはふ霜夜かな

箸嘻嘻と子ども食堂窓若葉

高瀬俊次

手塚智之

幾千の無言の祈り初詣

五年後の庭の見取図苗木市

西日射す三角ベース五回裏

日だまりの座を分かち合ふ冬隣

警策びーと薄明の堂訝ゆる

田中洋子

常盤貴美子

ほぐれんといのちを揺らす牡丹の芽

頬寄せて牡丹の精をもらひけり

咲き満ちてみちたりて散る夕牡丹

泣きながら童がくるよ花菜風

手火花や少女に兆す反抗期

欄干に真鯉寝ている五月晴れ

秋の暮食べ損なつた鰻かな

血圧と酸素濃度の敬老日

到来の熟柿掬うや銀の匙

コロナ禍や巻織汁の具沢山

喪心をのせる無言歌春の月

花菖蒲よき時代知る長屋門

山峡の橋の涼しき高さかな

うねり来て獣めきたる芒原

軒に積む薪の匂いや山眠る

(日航・翡翠)

朽尾まほ

内藤 繁

街なかのサルビア花壇日照雨

蟻走るありきたりにはあき足らず

蛇の目蝶かまくら道のくらがりに

忘れ物さがし回りにて冬の蝶

裸木の影やはらかき教会堂

富田 誠子

永井 かほる

コロナ禍に鎮まりたもれはたた神

海の碧初夏の富士山空の青

天窓を額縁にして上り月

浜へ出る径は茅花流しかな

寒の雨枝にしづくの花光る

(天為湘南)

崖紅葉芭蕉天神ひそと建つ

参道は身幅ほどなり稲穂波

豊の秋低き鳥居を額縁に

その昔屋敷神なり小鳥来る

柏手やかたへに柿の落つる音

(たけのこ)

みちのくの闇の鼓動の大ねぶた

冬瓜汁をすすりてけふの恙無し

月下美人夫へと花香を放つ

火恋し夫の作りし皿一枚

学僧の鐘の一打に初紅葉

長澤 義雄

西野 洋司

初晴れや大雲海に富士一つ

(波)

顔面に燕返し風の風を受く

山めぐり長谷に祈りて初夏の海

白昼の日射しに溶くる緋のカンナ

鐘の音や夕日呑みこむ冬の富士

永塚 亨司

芳賀 陽子

ふらここの高さ競ふや兄妹あにいもうと

夏めくや乳歯抜けたと吾子の告ぐ

オンラインで友と語るや四葩咲く

猛暑日や無人の野菜直売所

酌み交はす日はいつならむ温め酒

ああ五月血の滾るまで語りたき

(終・みちくさ)

雨の日はわが窓見つむ向日葵君

江の島にゐたるた左巻きマイマイ

走り蕎麦しかも老婆の手切りそば

黒土には祖先の力大根蒔く

鋭角の西瓜はなしをまるくする

(サンシャイン)

縁日のすくわれ上手という金魚

一冊の棚の隙より秋立てり

それぞれを個性といえば榎櫃の実

月明り垣根の隙を編んでゆく

萩原 ふみを

蓮池 虚高

ひとりづつ抱きしめられし卒園児

大試験すみ大股で帰りし子

脱ぎし靴きちんと揃へ雛の客

老鶯のひと声に良き目覚めかな

初霜や蹶る子走る子声張る子

橋本 信一

早田 登

色重ね果て見ぬ名画雁渡る

讀もなく涯てなき道よ夏の蝶

はらわたに沁みるひぐらし聴く夕べ

縁人何ゆえ思う百日紅

体中焼けつく暑さ音もせず

(はまべ)

故郷の山道に似たる落葉ふむ

拡き野に小さき草芽見つけたり

花開くいつもの道に初音聞く

残雪を背に若葉の拡がりぬ

終列車去りし駅舎に虫の声

風船が戦争末期の新兵器

蒲焼にされる鰻の長い旅

終戦日敗戦ほけと平和ほけ

ぼうふらの直立不動ひとやすみ

望月よりしみいづるチエシヤ猫の笑

原田稔

平岡法子

階や一歩一歩の春日差し
春牡丹光吸い込む蕾あり
筍の重みに重ねし友の情
千歳飴持ちかねながら歩む孫
散歩道蜂の巣残し冬木立

待ちし梅古木に咲いて香の淡し
手をつなぐ人の鎖や原爆忌
早空エアコンと日々籠りけり
満月や共に愛でし日懐かしむ
日の匂い残りし落葉踏みて行く

原山 テイ子

廣崎 龍哉

ふり返ることなく逝けり春日傘
夏帽子名前つけたし今日の雲
知る人も少なしこの世花は葉に
平らかな徑につまづく秋桜
夕焼に遺影翳しぬ女の子

万物の輝きわたる初日かな
春の空キリンは首を持って余す
風鈴屋銀座の風も売つてをり
行く先は風にまかせて草の絮
枯蟪蛄戦意いまだに衰へず

福田 善吉

藤田 真知子

(冬すみれ)

(天為湘南)

自服する茶釜のたぎり春惜しむ

チエロの音の流るる夕べ春惜しむ

郵便も人も来ぬ日や菜の花忌

紺海の白き航跡夏きざす

平凡という幸せや今朝の春

旧友の訃を聞きし夜や遠き雷

冷麦や男ひとりの今日終わる

蛍籠抱きて少年恋を初む

秋空を映す硝子戸拭き上げぬ

たそがるる花野の果てにけもの道

藤田 松邑

保里 よし枝

(サンシャイン)

江の島や五輪の帆消え秋徽雨

秋の蝶何度でも道聞き直す

半世紀路傍の菊を繋ぐ妻

稲光振り払いつつ救急車

秋明か賽銭正座で六地藏

空を囁む鉄のリズム松手入

秋の陽や観音笑顔で出迎える

木の实踏む目的地へはまだ遠く

いつの間か馴染みし仁王秋の空

震度五弱背骨みしりと夜寒なる

堀 口 みゆき

(鷹)

烏雲に入るクリムトの金の渦
大屋根の雨しづかなり蓮の花
櫂から湧きあがる鳥ハンモック
皂角子の実や青空のひりひりと
色鳥や山の麓に籠を編む

馬 来 まち子

(サンシャイン)

木伝ひに風通りくる夏座敷
八月の雨降つてをり姫街道
起き上り小法師ころんと秋思かな
冬立つや門前町に七味売り
ありがたうに涙ぐむ子や冬菫

宮 川 敏 彦

(波)

谷戸奥に際立つ声や時鳥
朽ちかけの木仏の笑み秋の暮
百年の杜の未来へ木の実落つ
紫木蓮老舗女将の勘所
とめはねと句碑なぞるかに飛花落花

宮 永 武 彦

(サンシャイン)

黄昏や秋の列車に波の音
静寂の瞬きを駆け運動会
原罪の瘡蓋のごと秋の雲
缶ビールが空っぽさびしさを飲み干して
絶海の慕情花すみれ一輪

宮本哲雄

武藤元子

(はまべ)

せせらぎや紫陽花あをく晴れわたる

焼き茄子や赤提灯に誘はれ

雨止みし葉桜の道とんび舞ふ

紫陽花の雨の重さにかたむけり

渡り鳥命ふたび華やげり

三好 惊子

村上京子

短夜や匂帳を胸に消灯す

定位置に亡父の座椅子火の恋し

一人居に煮詰まる匂ひ夜のなべ

朝寒や婆の読経にねこはひざ

カフェテラスぜんざいありの敬老日

金亀子よ網戸しめましょ又あした

日当たりで働く方に編笠を

七夕や今宵は雷も潜んでる

コロナとはぐうちよきばあとごめんして

子の為に擬傷する鳥適だ

湘南の風の包みし春キャベツ

抜け道は鳥の楽園草青む

柵越えの枝先香る花蜜柑

里芋や小柄な義母は子沢山

風は秋杖を頼りに退院す

森 本 明 美

森 本 琢 実

(はこべ)

悴むやごもごも生きて悪からず

おむすびに母の面影梅筵

九号の服また眠る衣更

地下足袋の足投げ出して三尺寝

一人旅地図に遊びし夜長かな

森 本 倅 乃 介

山 口 愛 子

暑い朝アイスを食べるピンとくる

夕暮れのまぶたの裏に朝焼けか

ゆうれいも食欲の秋うらめしや

カフエモカが様になつてる十とよの僕

つかまえた虫とりあみで入道雲

仕切り版隣の人の虎落笛

風冴えて富士の峰見る藤の沢

日向ぼこ本を開くかまぶた閉じ

春めくやトンカツ買ってこども待つ

まあいいか浮かぬアイデア浮寝鳥

青空を全部使つて柿を挽ぐ

天平の色と思ひし柿たわわ

山粧ふ鳥も獣も子を守り

林檎煮る私の時間明日は晴

リハビリに疲れし夫に毛布足す

山下遊児

買い物のメモが碁盤に女正月
流水と言う船団を迎えけり
時に父時にゴジラや雲の峰
とんぼうが自在に使う大気圏
立冬や水道水に芯生まる

山田潤子

(天為湘南)

鬼やらひ福来たる家の灯かな
ふらここや少女の心風に乗る
掌に息づく光初螢
一村を朱に染めたり柿簾
野仏に寄り添ふ石路の花明かり

山田節子

五月の陽浴び充電の時とせり
子供らの描くアマビエ星祭り
秋光や牧より続く牛の鈴(チロル)
幽かなる風のトレモロ秋闌ける
足跡を消しゆくは誰冬の浜

(波・はつゝ)

山田貴世

(波)

潮騒は高み高みへ初弁天
躓くな若いつもりの春シヨール
海境のあたりか亀の鳴く日なり
実朝の海漫々と立夏かな
湘南のこの川が好き通し鴨

山田敏雄

ラルビ・シスマ・イイノ

(天為湘南)

子らの声空に弾みて日脚伸ぶ
流水のひしめく音のオホーソク
花吹雪黙して過ぎる人の群れ
颯爽と背筋を伸ばし初浴衣
ガリバーの影の長さや秋夕焼

吉田和子

(はな)

ゆつたりと押す車椅子朝桜
面影はすぐに思い出青蜜柑
木道の靴音も良し山法師
挽ぎたての夕焼色のトマトかな
古民家にひっそり生けし秋の草

仏 : Grands bambous tendre soleil d'automne, Le jardin
du temple

英 : High bamboo trees tender autumn sun a temple
garden

日 : 高い竹秋陽やさしう寺の庭 (シスマ訳)

仏 : Cette nuit la l'amour était ivre au clair de la lune.

英 : Moon light, love was drunk that night!

日 : 月明やあふるる愛に酔ひこゝろ (堀口訳)

仏 : Le soleil d'hiver evaporera la goutte d'eau

英 : Winter sun will evaporate the drop of water

日 : 万物の蒸発冬の太陽に (堀口訳)

仏 : Bonne année! Sur le cyclamen fonda la neige

英 : Happy new year! The snow has melted on the

cyclamen

日 : おめでとう雪解けてゆくシクラメン (堀口訳)

仏 : Belle ville de Tokyo. Les arbres de ginko, un tapis

jaune.

英 : Beautiful Tokyo, Ginko trees, a yellow carpet

日 : 東京美し銀杏並木の黄じゅうたん (堀口訳)

渡辺正剛

破れ障子犯人いづこなめくじり

老いたればごまめの齒軋りなめくじり

稻雀翻筋斗打つて地に墮ちん

嫋嫋の手振り魅さるる風の盆

黄落やおほかたの友地下に逝く

渡部喬

(季)

川流る水の匂ひか龍淵に

今日の宿^{すど}すずめ探せる秋^{あき}徼^{ひかり}雨

万策も尽きたるやうに敗れ蓮

早世と言はれぬ歳に曼殊沙華

あざむかれ来し文芸の野分かな

渡部有紀子

春雪の鳥居幾度海の鳴る

スノーカーに砂がきらきら卒業す

冷房の効きすぎでゐてテレワーク

身のどこか鯖釘のありきりぎりす

暖炉燃ゆピアノに映る人逆さ

(天為湘南)

第四十六回一遍上人忌俳句大会

応募メ切 令和三年八月二十日

今年度もコロナ禍につき大会が中止。

応募句のみとなりました。

参加者 応募者119名(238句)

応募句成績

○遊行寺賞

大坪 正美

新涼やペンのをさまる手帳の背

中根 美保

迷ひをる流灯へこゑ掛けてやる

○青木賞

伊藤 伊那男

形見なる杖にも馴れし秋彼岸

原 雅子

機音の路地に育ちて地藏盆

○北澤賞

増井 智子

遊行寺の風が風追ふ芒原

小松原 キイ子

遊行忌やたがひにゆづる花野道

○市長賞

加藤 いろは

帰郷せり葛の葉返す風の中

紺谷 健一朗

海蝕の巖しろじろと終戦日

○協会長賞

河本 朋広

底紅や今も屋号の通る家

中村 みき子

子を膝へ母の流灯消ゆるまで

○協会賞

小泉 恭子

鳥ごゑのさやけき坂も一遍忌

山田 貴世

川あらば川に憩いて一遍忌

塚田 佳都子

人の死のこつんとありぬ蘇鉄の実

二人とは独りと独り今日の月

山下遊児

心地よき人疲れなり盆踊

宮川敏江

堂めぐる木の香風の香一遍忌

羽住博之

二百段息づきのぼり海は秋

小林和子

くり返す波のさみしさ夜光虫

鈴木千枝子

蓮の実の飛んで学僧小走りに

畑昌子

白蓮の闇押開く朝かな

石森政光

大空へ道を作りて鳥渡る

松坂真理子

貧者にも月照りわたる一遍忌

高橋きよ子

荒草に朝露ひかる一遍忌

鈴木三枝子

市民俳句春の大会・秋の大会は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止を図るため安全を考慮し、中止となりました。